ROTARY SERVING HUMANITY

人類に奉仕するロータリー

2016～2017年度RI会長
ジョン.F.ジャーム

1. 真実かどうか
2. みんなに公平か
3. 好意と友情を深めるか
4. みんなのためになるかどうか

第2780地区
大磯ロータリークラブ

★事務所：神奈川県中郡大磯町国府本郷546大磯プリンスホテル内　TEL：0463-61-1111(木) TEL/FAX：0463-36-2255
★例　会：毎週木曜日　12:30～13:30　大磯プリンスホテル　TEL：0463-61-1111　FAX：0463-61-6281
会 長　百瀬 恵美子　会長エレクト　新宅 文雄　幹 事　井上 浩吉

第２３８２回　例会　平成２８年８月４日　No.5

■司会:大藤　勉　■点鐘：百瀬 恵美子　■合唱：君が代・奉仕の理想

◇プログラム・８月11日：祝日休会・8月18日：休会(定款適用)　・8月25日：ゲストスピーカー関博子様

◇出席報告

例　会	会員数	出席数	出席率	ﾒｰｸｱｯﾌﾟ	修正出席率
２３８２回	14(12)	7	58.33%	―	―
２３８０回	15(13)	8	61.53%	―	―

◇欠席者(５名)
宮澤、石山、原、太田、野田さん

◇ﾒｰｸｱｯﾌﾟ(0名)

◇ゲスト紹介：原貫太さん(バングラデシュ国際協力隊”BICP”初代代表、早稲田大学4年生、社会学部)：本日はお招き頂き有り難うございます。2ヶ月前の5月31日に1年間のアメリカ留学から帰国しました。大磯クラブでの卓話は今回で4度目になります。30分の短い時間ですが1年間のアメリカ留学や留学中に2ヶ月アフリカに旅行した事など話させて頂きたいと思います。よろしくお願いします。

◇出席報告　河本親秀委員

◇会長報告　百瀬恵美子会長

今日は！夏本番です。熱中症に罹らないように水分を十分取って下さい。リオ･オリンピックが明日からはじまります。日本人選手の活躍が楽しみです。

1. クラブ委員会活動計画書が出来ました。お目通し下さい。この計画に従って皆さんと手を携えて活動して参りたいと思います。

2. 7月19日の会長幹事会で決まったこと

1)エンドポリオ・ナウ・キャンペーングッズの物品を使い活動に力を入れて欲しい。

2)平塚RC60周年に向けて

・チャリティゴルフコンペを11月14日にレイク・ウッドCCで行うので参加下さい。

・記念式典は来年2月23日にサンライフガーデンで行います。

・記念講演会は来年4月20日駅ビルラスカホールにて，講演者はジャパネット・タカタの会長

・各クラブの活動紹介の展示用パネル（サイズは半畳くらい）をお願いしたい。皆さんと相談し河本さんに作って頂きたいと思います。

3. 第8グループ合同による新会員の集いを開催。9月8日18時と来年2月8日18時。対象は入会5年以内の会員。場所は平塚商工会議所。詳細は平塚RCの主導で決めます。

4. 本年度のIMは来年2月18日（土）。ホストクラブは平塚湘南RCです。

5. ロータリーデーの開催日時は来年2月に行う。案としてベルマーレ･ワンダーランドとのタイアップ

会員増強及び拡大月間

もあって良いのでは…
6. 先週のなぎさの祭典に参加された8人の皆さん有り難うございました。特に守屋さん、田中さんお世話お疲れ様でした。8名参加。タオルを配り、大変好評でした。大磯ロータリーのチラシを見て頂いて、クラブのアピールが出来ればと期待しています。
7. 例会終了後理事会をモロキニで行います。

◇幹事報告　　井上浩吉幹事

1. RI日本支局の島村さんより、日本の実情に合わせた例会の取り消し規定の補助資料の案内
２. 8月のロータリーレートは102円。
3. NPO法人”大きなおうち”（図書館）から人形劇祭への協賛のお願い。
4. 神奈川県障害者自立支援センターより「障害者理解促進研修説明会」開催の案内。
5. 週報:小諸RC
6. ロータリアン誌
7. クラブ委員会活動計画書：平塚湘南、二宮、平塚北RC。

配布：
1. 大磯RC第50期クラブ委員会活動計画書2. 週報1号~3号
3. ガバナー月信2冊=7月、8月号
4. ロータリーの友

◇委員会報告：

☆スマイルボックス　　田中敏治さん

・百瀬恵美子さん：原貫太さんようこそ。宜しくおねがいします。
・井上浩吉さん：原さんようこそ。
・河本親秀さん：原貫太さんアメリカ交換留学無事成功修了おめでとう。今後の活躍を期待しています。
・河本親秀さん：原貫太さん卓話楽しみにしています。手塚さん活動計画書作成、完成、有難う、お疲れ様でした。
・田中敏治さん：みな様 なぎさの祭典お疲れ様ですた。ありがとうございます。原さん、お帰りなさい。本日はお話し楽しみです。

☆田中奉仕活動委員長：
皆さんのご協力のもと、7月30日大磯なぎさの祭典で広報活動が出来たこと有り難うございます。今年の花火は至極綺麗でとても良かったです。また来年もよろしくお願いします。

☆河本さん：。

友好クラブのハワイ･ワイアナエ･コーストRC（WCRC)会員のケイ・バクスターさんから、同クラブの会員でハワイ地区のガバナーエレクトであるナラニ･エディス･フリンさんから2018年5月の地区大会にお出で下さいとの言づてがありました。こちらから大磯RCも来年4月13日（木）に創立50周年を祝う式典を行うことを伝えたところ、ケイさんから皆に働きかけますと言う事と、ご自分が来年4月20日に来日する予定があるので、非出席したとの申し出がありました。
ケイさんは今はご主人Jereとその息子さんの病気（癌）療養のため、カリフォルニアに移住されていますが、今も大磯RCの週報を英訳してはWCRCに送って下さっています。若し日本からハワイの地区大会に大磯クラブが来るなら自分はハワイへ行くという熱心さです。こちらの訪問のチャンスとしては百瀬会長が年1回必ずハワイに行かれるので、その時クラブを訪問出来るかも知れないと言ってあります。

◇ 卓 話

◆◇◆アメリカ留学報告方針◆◇◆

原貫太さん

5月31日1年間のアメリカ交換留学から帰って参りました。このアメリカ留学と冬休み中に3週間アフリカに渡航して現地の実情を見て参りましたのでその報告と時間があれば自分の将来の計画についてお話しさせて頂きたいと思います。

アメリカ留学：

2015年8月18日~2016年5月31日

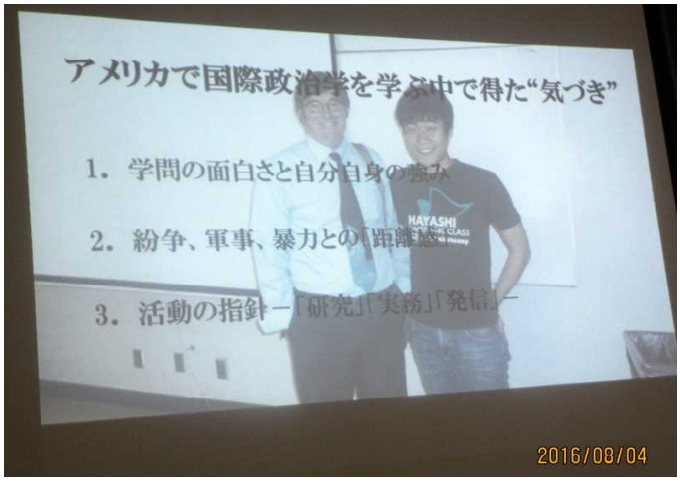
私の留学は単なる語学留学ではなくて早稲田大学からの派遣留学生として、カリフォルニア大学のチコ校に留学しました。現地の大学では国際関係論International Relations を専攻しておりました。現地のアメリカ人と同じように国際関係論を専攻し授業を受け、実習をしておりました。このチコ校は国際関係論に関して非常に有名な大学です。模擬国連というのがあり，模擬国連全米大会に過去30年連続入賞しています。過去にはハーバード大学やスタンフォード大学と言った世界トップレベルの大学を抑えて上位を獲得するような優秀な学生が集まっています。

目標：国際関係のプロフェッショナルになる

この留学に際して様々な思いを持っていましたが、自分に一つの課題を課していました。将来国際協力のプロになった時に自分が従事すべき問題分野を探す事。国連のような働きたい機関でもなく組織でも無く，自分が改善、解決に向けて貢献したいと思える分野，問題領域を見いだしプロフェッショナルになることを目指す。例えば児童労働の問題に対して国際機関でも政府機関でも民間のNGOでもどの機関でもこの問題に取り組むことは出来ます。しかしこれらの機関に入ってこの問題に携わるよりも、プロフェッショナルになって問題解決に貢献する方がより長く，より深く国際協力の世界に携わる事が出来ると私は考えています。バングラデシュのストリートチルドレン問題に取り組んできましたが、それだけでは判断材料としては乏しいので、自分の関心のある事業に関する授業をできるだき多く取るようにしました。

結論から申し上げますとアメリカの大学は日本の大学とは全然違って，もの凄い量の課題が毎週課されます。例えば毎週リーディング課題として、次週までにこの論文を読んできて下さい。読んでいないと授業にもディスカッションにも参加できない。授業について行けなくなってしまう。その論文が4つの授業にあって毎週200ページ前後出されていました。そのリーディング課題をこなさないと授業にはついて行けない。そして毎週のように小テストがあったり小リポートがあったり、中間試験，中間リポートがあり、学期末には1学期の総まとめとして研究課題を与えられてそれに対して2,000~3,000ワード、また最後の総まとめとして期末試験があり、日本の大学と違ってもの凄い課題が課せられていました。私は日本人なので、アメリカ人学生と比べて語学面に不利がありましたので、もの凄い量の勉強を半強制的にさせられていました。しかし結論的に申しますと、各授業の評価はA+,A,B,C,D(Dになると単位は取れない)

大部分がA+を取ることが出来ました。（会場:凄い!!）毎日習慣になってそれ程きつくはなかったですが10時間くらいは勉強していました。そうでもないと付いて行けなくなってしまうので。



留学して気づいた三つの事

アメリカで国際政治学を学ぶ中で三つの気づきについてお話しします。一つ目が学問の面白さと自分自身の強み：日本の大学と違い、アメリカの大学では毎日猛烈に勉強し、しっかり発信したり、教授に噛みつくくらいのディスカッションをしているのを見せて貰った。そしてそこに自分も加わることが出来た。今までバングラデシュのストリートチルドレン問題に取り組んでいたが、ローカルな視点、ミクロな視点で見ていた自分が、マクロな視点から理論的に考えてそのシステムを解き明かそうという姿勢をアメリカ留学の勉強から気づかせて貰った。学問の面白さを気づかせて貰った。

留学が始まった最初の頃はヒイヒイ言っていたんですが、終わってみればしっかりした成績を取ることが出たんで、学問の世界でもやって行けるのではないかという自信を手に入れる事が出来ました。

二つ目の気づきが戦争、軍事、暴力との距離感です。国際関係論のクロスビー教授＝2時間も授業を取っていた=は元アメリカ陸軍の兵士でクエート侵攻、パナマ侵攻の時に最前線で従軍を経験している方です。ジェイコブ教授は国際関係論学科長で、アメリカ国防総省=ペンタゴン=でテロリズムの教鞭を執っている。非常に優秀な教授で，自分が進学すべき大学院の情報を貰ったりアフリカ渡航についてのアドバイスを貰ったりバングラデシュのことについてアドバイスを貰ったりしました。このような教授と身近で学問を学び、授業をとらせて頂いた経験は日本で

はなかなか出来ないことです。紛争や軍事や暴力との自分との距離感を再考する切っ掛けになりました。

三つ目が活動の指針、研究、実務、発信．これはアメリカ留学中自分と向き合う時間が多かったこと、留学前はバングラデシュの事でバタバタしていて、自分の将来についてゆっくり考える時間が無かった。アメリカ留学中自分に向き合う内にふと自分の中でひらめいたのですが、自分のこれまでの活動を振り返ってみると、およそこの三つから成り立っているのではないか？

先ず研究はアメリカに1年留学して国際政治学を勉強してそれなりの成績も出して、また早稲田大学で社会学を専攻する傍ら副専攻として平和学とグローバル･リーダーシップ学を勉強しています。自分は学生としてＮＧＯ活動、ボランティアなどをしているから学業を疎かにしてよいとは思ってはいなくてしっかり両立させることを意識しています。それでこれまで大学で成績をしっかり取ってアメリカに留学して現地の大学で専門的に学ぶ事が出来て研究と言う事も自分にとって自信になっているのかも。

もう一つは実務です。これまでボランティア形式にしろバングラデシュに足を運び現地のＮＧＯと共同して活動する中でその運営に携わってきた事。またアフリカに出向いて現地の人々から話を聞き活動の現場を見せて貰うという足を動かすことを行っている自分は実務も自分の活動の指針となっているのではないかと思います。

そして三つ目は発信です。自分の見た事、聞いた事，感じた事を自分だけで終わらせてしまうのでなく，しっかりと社会の人々に対して還元する、伝える，自分と同じ若者にも届けると言う事をこれまでやって来ました。その点で自分は発信もしっかりとベースにしてやっているなと自覚しております。

この三つの活動の指針にアメリカ留学を終えて今改めて気づかされています。そしてこれからも自分の指針になって行くのではないか，この研究、実務、発信それぞれのスペシャリストになりたいと考えています。

アフリカ渡航：

アメリカ留学中１ヶ月の冬休みがあり、12月31日に東アフリカのルワンダという国に行きました。またその隣国のウガンダにバスで行きました。渡航の目的は今まで一度もアフリカに行った事がなかった事もありますが、今までバングラデシュでの活動とアメリカで政治学を学んでいる過程で何時も問題意識･関心を持っていた三つの問題がありました。

一つはルワンダの大虐殺の問題です。これは1994年、フツ族系の政府と過激派のフツ族により、100日間で少数派で穏健派のツチ族80万人が虐殺された事。20世紀にアフリカで起きた最大の悲劇と言われている。この虐殺はナチスドイツによる外国人虐殺の3倍に上ると言われています。ルワンダ滞在中に虐殺現場を4カ所訪れました。一夜のうちに1万5千人が虐殺された教会の跡地に犠牲者の遺骨が展示されていて写真撮影しました。

二つ目がHIV/AIDSの問題です。サワラ砂漠の南で特に問題になっています。彼（写真）は5才で母親を亡くし、2008年に父親を亡くした20才の青年です。足長財団がウガンダでHIV/AIDS孤児のための孤児院を運営されており、そこを訪問させて頂いて活動の様子を見せて頂いたり、彼の話を聞きました。

三つ目がウガンダの子供兵の問題です。今日は時間の関係でこの子供兵の問題だけ話させて頂きます。先ず自分が子供兵に関心を持った経緯についてですが、子供兵というのは最大･最悪の児童労働と言われています。児童労働はILO=国際労働機関の条約138号と182号に基づいて4つに分類されています。その中に子供兵は最悪の形態の児童労働であると規定されています。バングラデシュのストリートチルドレン問題や児童労働の問題と向き合う中で，最悪の児童労働とはどう言うものか自分の頭の中でもやもやがあった事。もう一つがアメリカの大学で国際政治学を専攻し政治が紛争に絡んでいる事と人道問題への関心、自分が初めてフィリピンで出会った路上で物乞いをする少女、バングラデシュのストリートチルドレンの抱える問題等自分が取り組んできた子供の問題がある。子供兵の場合は紛争下で逃げ回っている子供ではなくて戦っている子供である。このことが自分に関心を持たせました。様々な文献や映像を通し子供兵に対する理解を深めてきたのですが，知れば知るほど子供兵問題の実態というものは何処か遠くのもののように感じていました。自分は一度問題意識を強く感じたもの、関心を持ったものに対しては中途半端に終わらせる事が出来ないタイプの性格なので、時間があるのなら、現地へ行って話を

聞いてみようと思い立ちました。
認定ＮＧＯ法人テラ･ルネッサンス（本部は京都）がウガンダの北部で元ウガンダの子供兵の社会復帰の機会を提供しています。その施設を訪問させて頂きました。
子供兵とは正規、非正規を問わずあらゆる軍隊に属する18才未満の兵を言います。アジア、アフリカ、中東、中南米の紛争地域を始めとして今も25万人以上の子供兵がいると考えられています。彼らの担う役割は多数あります。敵対勢力との戦闘、村の襲撃、地雷原を歩かされて人間地雷探知機として使われるケース、最前列で行進させられて弾よけとして使われるケース、少女兵の場合は性的虐待や強制結婚，勿論少年兵も性的虐待を受けるケースもある。所長からお聴きした実際のケースとして報告されているのが、彼らが洗脳されるために最初に上官から与えられる任務として、実の親や兄弟を殺したり、或いは四肢を切り落とす事を強要されるというケースが多数報告されています。一番初めの任務として家族の兄弟の命を奪う事で、殺す事に対する抵抗をなくさせる、もう一つの理由は帰る場所を無くさせる事。こういう場所から脱退する子供もいるのですが、脱退しても自分の親や兄弟を殺している場合は帰ることが出来ない。そもそも家族がいない、またコミュニティからも完全に追い出されてしまう。その為に最初の任務としてこういう事が強要される。
元少女兵のアイシャさん（仮名）にインタビューしました。基本的にはプロのジャーナリストの方達とのインタビューは断っているそうなのですが、日本の学生が来たというので今回特別にインタビューさせて頂きました。後刻日本人の職員の方から日本の大学の学生がわざわざここまで足を運んで元少女兵にインタビューするというのは今までなかった。プロのインタビューなら断っただろうに何故貴方とはしたのか分からない。＝最終的にはウガンダ人の所長から許可を頂いていたのですが＝私は英語で所員の方に話して、所員の方が現地語に通訳してインタビューしました。
ウガンダ少女兵の話：
サーシャさんは2000年12月16日、真夜中、反政府軍=神の抵抗軍、以下LRA=に誘拐されました。当時僅か12才でした。拘束されてから密林を歩き回る生活が始まりました。そこには数え切れない困難が彼女を待ち受けていました。一日中重い荷物を持たされ森の中を走りました。休息は夜に少し取るだけ。この苦しい生活に慣れるのはとても難しかったと彼女は話しました。人が殺されるところを幾度もLRAは彼女を洗脳するために何度も人殺しの現場を見せた。2003年までウガンダ北部の密林を歩き回りました。その後政府軍によるLRAの掃討の勢いが増すと生活は非常に厳しくなりました。
2004年スーダンに移動しました。スーダンにいる時にも政府軍の掃討が数回あったため、2006年コンゴ民主共和国(DRC)に移りました。彼女は常にLRAと行動を共にしなければならなかった。それは幼いサーシャさんにとってとても辛い事でした。DRC滞在中に仲間と一緒に脱走を試みましたが捕まってしまい、彼女は鞭で200回打たれました。それからは脱走する事は諦めました。コンゴの密林を反乱軍と共に動き回る日が長く続いたある日、子供が生まれた。幼い子供を連れながら政府軍から逃れるため、森の中を走る事は大変な事だった。子供を抱き、銃を担ぎ身の回りのものを背負いながら森の中を走る。筆舌に尽くせないほど辛かった。コンゴから中央アフリカに移動し，またコンゴに戻る。こんな生活が長く続きました。2014年彼女はウガンダの政府軍に救出されました。2000年12才から26才まで実に14年間少女兵としての生活を強いられました。
救出後の生活は監禁生活と全く違い，ここでは人々がお互いの権利を尊重し合い，家族は守られています。拘束されていた頃は何も言う事が出来ず、ただ命令に従うしか無かった。荷物を運べと言われては荷物を運び、村を襲えと言われれば村を襲った。命令に背けば殺されるまで罰が科されたと彼女は言いました。拘束から逃れて戻って来た時、彼女には3人の子供がいました。持ち物は何もなかった。でも幸せだった。拘束から逃れられた、ただそれだけで幸せだったと彼女は話しました。最後にインタビューの終わりに彼女は僕にこう話しました。「今はテラ・ルネッサンスで技術や基礎教育を受けられる，その事が自分を幸せにしてくれます。ここでの学びを生かし、卒業後はもう一度自分の人生を変えたい。そして子供達の未来を支えたいと願っています。」
今私がアフリカで見た事、聞いた事は現在記事を執筆しています。アメリカにハフィントンポストという10年くらい前に開設された世界的に大きなインターネット新聞があって=イギリスのBBC，アメリカのCNNに匹敵するくらいの大きなメディアがあって，日本でも3年前から開設されています。日本で1か月で3,500万人がアクセスしています。そこで記事を執筆させて頂いています。これまで50本以上記事を執筆しています。ハフィントン･原貫太或いは原貫太で検索して頂くとハフィントン･ポストの記事が出てきます。お時間がある時是非ご覧になって下さい。

今後の予定：

1．ウガンダの元子供兵に関するインターンシップ：実際自分が足を運んだ事もあり、今現在テラ･ルネッサンスの職員の方とインターンシップをやらせた頂けないかやりとりしています。現地に長く暮らしながらプロの資格で研究を続ける．大学卒業後、即戦力になる為に今から現場での実務経験積んでおきたい。

2．バングラデシュでのテロリズムに関する研究：現在担当の指導教官と相談しているのですが、7月1日に日本人が7人も殺され、私自身も多くの事を感じさせられました。このテロリズムが起きる1ヶ月前の5月27日に「バングラデシュで高まるイスラム過激派。アジアで広がる脅威」と題して、ハフィントンポストに記事を寄稿しておりました。記事の中で、近いうちにＩＳによるテロが起きるかも知れないということを書いていたので、メディアの中でこういう記事を書いている大学生がいると取り上げて頂いた事も有り、もともとバングラデシュのテロリズムや過激派に目を向けてましたので、それをより深めた内容を卒業論文の研究にするのも面白いかなと考えております。来年の12月が論文提出期限なので、時間を掛けて考えて行きたい。

3．EU圏内の大学院に2018年9月以降進学したいと考えています。未だ具体的にどの大学院に進学するか決定はしてないのですが、候補としてはアメリカの大学のジェイコブ教授からお聴きしたチェコであったりオランダであったりフランスに優秀な大学院があります。国際関係論の中で人道支援であったり、人権、開発など国際関係論の大枠の中で何か一つ専門分野を身につけるためにEU圏内の大学院で修士号を取りたいと考えております。

ご静聴有り難うございました。

百瀬会長：今日は有り難うございました。これからも応援します。年に1回くらいはクラブに遊びに来て下さい。

例会後の理事会の後、河本が原貫太さんとお茶のみながら話しました：原君の希望進路は国際ロータリーとロータリー財団が重点項目の中の「国際紛争の解決」にぴたり当てはまるので、EUの大学院への進学は2018年度の地区財団奨学金に応募、そうして修士号をとった後、数年実務について、今度はロータリー平和フェロー奨学金に応募する道がある。今後とも大磯ロータリークラブとしてサポートする事を約しました。

２０８１回例会

平成２８年７月２８日　No.4

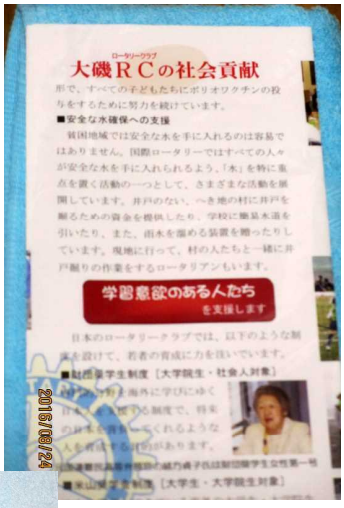
大磯なぎさの祭典協力

＝クラブ広報・タオル配り＝

7月28日の第2381回例会を7月30日の大磯なぎさの祭典でのクラブ広報キャンペーンに変更しました。

日　時：2016年7月30日16:30~18:00

場　所：大磯町県営駐車場

参加者：百瀬会長、井上幹事、新宅会長エレクト、田中奉仕活動委員長、守屋財団委員長、大藤会計、齋藤職業奉仕員、太田米山記念奨学委員(以上8名)

16時30分大磯町海岸県営駐車場入口前に集合準備し、18時開催のなぎさの祭典に集まった観衆/大磯町民（約8千人）に大磯町のマスコット･キャラクターである青鳩の’いそべえ’と’あおみ’と大磯ロータリークラブのロゴ入りタオル+大磯RCリーフレットのセット500枚をｊ祭典参加家族に1枚ずつ配りました。